
鉄瓶に
鉄の霰



堀米秋良

 Tokyo Mnemosyne 東京ムネモシュネ

Tokyo Mnemosyne e-books

<http://haikustock.com>

A4用紙に印刷して2つ折りにします。右端をホッチキス留めするとA5判の小句集に仕上がります。
個人で楽しむ範囲でのダウンロード、印刷以外の無断転載・コピー・流用は一切禁止します。

墓洗ふガダルカナルと読めるまで

霊長類ヒト科人類被爆の日

渡り鳥望遠鏡を通り抜け

啄木鳥や森の鼓動の恙なく

戦争は畳の上に敏雄の忌

伏して泣く仰け反って泣く涅槃かな

玉碎は昭和の歴史すみれ草

囃されてお天道さまも花に酔ふ

てのひらに載る一句集不死男の忌

叩いても鳴らぬラジオと暑い夏

芋の露触れなば落ちむ触れずとも

遠吠えは狼の血か雪月夜

鷹化して鳩日の丸は海を越え

籠枕から息の根にかよふ風

汗臭し馬に蹴られて死んだ筈

3

幽霊の十人十色盆の寺

古摩羅は手に睡たしや十三夜

ふぐと鍋夕日はいつも波の上

木枯のあと大いなる計がひとつ

月の夜の厨に十三の寒蜩

4

風垣して十三の湊のありとのみ

さくら湯の花一輪の日の出かな

辛夷咲く岩手の神は子沢山

鉄瓶に鉄の霰ややませ吹く

四畳半畳の上の原爆忌

5

みちのくは判官鼯鼠葛の花

見返ればやっぱり美人雪女郎

裏口にむかしの土の春の泥

英霊はみな土の下桜咲く

早起きは曾祖父ゆづり朝桜

6

朧夜は駱駝の背で涉りたし

人間は星を食ふ虫蠹ぼこり

亀鳴くといふ俳諧の世はうらら

文鎮のくろがね重き梅雨入かな

放屁して馬の春愁埒もなし

玉の汗搔きたし遠くまで歩き

ラジオから世界のニュース夕端居

ほどの緒は土の下なり雲の峰

青畳踏めば足裏にみみず鳴く

ほとばしる水に力や竹の春

胃の腑まできれいに落ちし洗ひ飯

色鳥の色とりどりの番かな

一室にくぐもる紫煙獺祭忌

くちなはの縄一卷を推し量る

みちのくは一山三文栗ひろふ

縁側に座ればわれも柿日和

白障子三尺開けて人を恋ふ

黄落や筆舌夙に衰ふる

天網に引っ掛りたる鴟の贅

夕日いま終焉のとき干大根